

## 高校で第一外国語として日本語を学んだ学習者の動機とその変容

—学習開始以前から現在まで 中国にある普通科高校を例に—

大日方 春菜

### 要旨

本稿では、高校での日本語学習を支える学習動機とその変容を明らかにするために、中国内モンゴル自治区にある普通科高校で第一外国語として日本語を選択し、3年間の学習を終えた卒業生4名に行ったインタビュー調査の結果を報告する。データの分析には、複線径路等至性アプローチを用い、日本語学習過程を可視化し、時期に応じた学習動機の存在と、その変容を分析した。その結果、4名の径路は4つの時期に区分でき、それぞれの時期に応じた学習動機や動機づけが存在していることが分かった。学習開始当初は類似性のあった4名の径路は、卒業後の希望進路を意識する時期から分岐していき、学習動機や日本語学習に対する価値観や信念が、環境や外的な要因に影響され変容していく過程が明らかとなった。

**キーワード** 中等教育, 学習動機, 動機づけ, 複線径路等至性アプローチ, 中国人学習者

### 1. はじめに

中国の中等教育での日本語学習者数は2015年度調査<sup>1</sup>まで大幅な減少傾向にあったが、「海外の日本語教育の現状 2018年度日本語教育機関調査より（国際交流基金2020）」で増加に転じている。2015年度調査で52,382人だった中等教育での日本語学習者は、2018年度調査では90,109人と倍近くになったが、これは「中国語話者にとって比較的学習しやすい日本語を大学入学試験の外国語科目として選択する学生の増加」（国際交流基金2020：30）の影響を受けていると考えられ、韓（2012）、李（2018）では、「英語が苦手な生徒のための日本語」という需要が存在していると述べられている。一方で、中国中等教育での日本語教育は、学習者の増加に伴う大きな転換期を迎えていると考えられ、学習動機や目的も多様化していることが予想される。しかし、中等教育で日本語を学ぶ学習者に目を向けた研究は少なく、特に学習者個人に焦点を当て、実際の日本語学習過程を追うような研究は管見の限り見当たらない。そこで、本稿では、中国内モンゴル自治区に所在する普通科高校で日本語を学習した卒業生に実施したインタビュー調査の分析をまとめた。日本語選択動機の発生から、現在までの過程を可視化し、動機の変容を探り、時期に応じた動機づけの有無を検討し、過渡期にある中国中等教育での日本語学習者へ適切な支援を提言することを目的とし、調査分析を行った。

### 2. 先行研究と本研究の位置づけ

日本語教育に関する学習動機研究の多くで、動機や動機づけは学習過程で変容していくことが示されている。ウクライナの大学における日本語学習動機を調査した大西（2010）では、低

<sup>1</sup> 出典：国際交流基金（2017）

学年層と高学年層の2つに分類し、それぞれの学習動機を比較している。そして、日本語や日本文化への関心は学年層に関係なく学習動機になっている一方で、低学年層と高学年層では、留学や仕事などに対する意識に違いが見られることが分かった。カタールで日本語を学ぶ学習者の動機を調査した根本(2011)では、「日本語への興味」という動機から始まった日本語学習が「趣味」として変容する過程が明らかにされている。また、中山(2019)では、シリアの日本語学習者を対象として、紛争開始前後の学習動機の変容を調査している。そして、紛争開始前は、日本語母語話者による授業や、日本人との交流が学習動機となっていたのに対し、紛争開始後はSNSを通しての日本人との交流や、日本人に紛争以外の文化的歴史的な「正しいシリアのイメージを知ってほしい」などの新たな動機が生まれていることが分かった。中国の大学で日本語学習動機を調査した楊(2012)では、学年に応じた動機の変化が明らかにされ、1年生は、日本のアニメや漫画など「日本語への興味」や「娯楽」が学習動機となっているのに対して、2年生はJLPTや専門4級試験<sup>2</sup>など「試験」が学習動機とつながっていることが分かっている。張(2017)では、中国の調査対象大学で日本語を専攻する学生は、学習開始当初、日本文化や歌などへの興味という「内発的動機づけ」が高い傾向があるが、就職・進学が身近なものとなる3年生においては、日本語を使って就職・進学したいという「外発的動機づけ」が高まってきており、日本語学習への動機づけは学年とともに変化していることが示されている。さらに、「日本語学習への努力」や「第二言語に対する自信」は学年が上がるにつれて下がっており、変容していく学習動機に合わせて、日本語カリキュラムを検討することが重要だと述べている。

これらの先行研究は、高等教育や生涯学習、趣味として日本語を学んでいる学習者を対象にしたものである。一方で、中等教育での日本語学習動機や動機づけの変容を、個人に焦点を当て分析している研究は管見の限り見つからなかった。そのため、本研究では、調査対象校である高校で日本語を学んだ既卒生に自身の日本語学習を振り返ってもらうことで、学習過程に応じた動機の変容を明らかにし、効果的な動機づけを検討することを目的とする。

また、先行研究においては「動機」「動機づけ」などの用語に共通の定義はされていない。そのため、本稿では、日本語学習理由や目的を「日本語学習動機」、日本語学習過程で「日本語学習動機」を強化し、新たな「日本語学習動機」の発生に影響を与えた事象を「動機づけ」と定義し分析を行う。

### 3. 調査概要

#### 3.1 調査対象者

文部科学省(2019)「諸外国の教育統計 平成31(2019)年度版」によると、中国の教育制度は6-3-3-4制であり、初等教育6年<sup>3</sup>、中等教育が前期3年、後期3年、高等教育は、日本の大学学部該当する本科が4年、学院と呼ばれる専科と、職業技術学院が2~3年である。本調査では、後期中等教育のうち、日本の普通科高校にあたる高級中学で日本語を第一外国語

<sup>2</sup> 日本語専攻の大学2年生が受験を義務づけられている到達度試験で、毎年6月に行われている(国際交流基金2016)。

<sup>3</sup> 一部都市には小学校5年・中学校4年、もしくは、9年間の一貫教育を実施する学校も存在する。

として選択し、3年間の学習を終えた既卒生を対象に調査を行った。後期中等教育は、高級中学の他に、中等職業学校、技術労働者学校、職業中学があるが、卒業後に大学本科への進学が可能なのは高級中学のみである。本調査の対象者は、調査協力が得られた内モンゴル自治区に所在する高級中学の卒業生である。また、本稿では中国の初等教育を「小学校」、前期中等教育を「中学校」、後期中等教育のうち高級中学を「高校」、大学本科を「大学」、大学専科と職業技術学院を「専門学校」と表記する。

インタビュー調査実施前に、調査対象校で日本語を学んでいる在校生にアンケート調査を行った。その結果、有効回答数 222 名中 71.6%が高校卒業後の進路として「中国で大学進学」を希望し、「中国で専門学校進学」は 5%と少なかったが、中国国内での進学を希望している者が計 76.6%となった（表 1）。また、調査対象校の既卒生 14 名に行った同調査では、実際に大学に進学したのは 4 名で、専門学校進学が 6 名、日本留学が 4 名という結果となった（表 2）。調査対象校に在籍している日本語学習者の大多数が中国国内での大学進学を希望しているものの、既卒生の実際の進学先は専門学校が多くなっている。これは、中国の大学入学試験である「普通高等学校招生全国統一考試（以下：高考）」で、より高得点が求められる大学への進学がかなわず、合格点が低く設定されている専門学校へ進学している生徒が多く存在しているためである。また、既卒生は、現在も筆者が直接連絡をとれる者が調査対象となったため、日本へ留学している者が 4 名という結果になったが、在校生全体を対象に行った調査では留学希望者は 12%程度と中国国内進学と比べ少ない。そのため、本調査では、高校在学中に多くの生徒が希望している「中国国内で進学」した既卒生を対象を絞りインタビュー調査を行い分析することにした。アンケート調査の回答が得られた既卒生 14 名のうち、中国国内で進学し、現在も中国に滞在している 10 名に調査協力依頼を行い、オンラインでのインタビューが実施できる設備が整っており、調査に協力が得られた 4 名にインタビューを実施した。そして、高校入学時に日本語を選択するまでの動機の発生過程や、その後の学習過程、卒業後の現在に至るまでの日本語学習動機の変容や新たな動機づけの有無を可視化し、動機の変容に合わせた支援のあり方を比較し検討した。調査対象者の概要は表 3 の通りである。また、調査対象校は、内モンゴル自治区に所在しているが、調査対象となった 4 名の母語は中国普通語である。

表 1 在校生希望進路度数分布

進路	%	N
大学進学	71.6	159
専門学校進学	5.0	11
留学	12.6	28
就職	5.9	13
その他	5.0	11
合計	100	222

表 2 既卒生進路度数分布

進路	%	N
大学進学	28.6	4
専門学校進学	42.9	6
留学	28.6	4
合計	100	14

表3 調査協力者概要

NO	卒業年	卒業後の進路	現在の専攻	インタビュー言語	インタビュー回数
A	2018	大学	日本語	日本語	3回
B	2018	大学	デザイン系	中国語	3回
C	2018	専門学校	医療系	中国語	2回
D	2018	専門学校	医療系	中国語	3回

### 3.2 インタビュー方法

インタビューは2019年7月～2019年8月に行われた。調査協力者4名は中国在住のため、中国のソーシャルネットワークサービスである「QQ空間」の動画通話を用いた。インタビューは調査同意書の読み合わせ後に承諾を得て録音を行った。インタビュー言語は、Aが日本語、BCDは中国語で実施し、筆者が各言語で逐語録化し、中国語部分は日本語へ翻訳し分析データとした。

### 3.3 分析方法

インタビューデータの分析には、複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: 以下 TEA) を採用した。TEA とは、「時間を捨象せずに人生の理解を可能にしようとする文化心理学の新しいアプローチ」(安田ほか 2015: 9) で、文化人類学者であるヤーン・ヴァルシナーが等至性 (Equifinality) という概念を取り入れ開発したものである。

TEA は以下の三段階を合わせたアプローチであり、個々人がそれぞれ多様な径路を巡ったとしても、等しく到達する等至点 (以下: EFP) を設定し、そこに至るまでの径路を可視化し、分析を行う (安田ほか 2015)。本研究でもこの三段階を通して、調査対象者の経験を時間的変化と社会的・文化的な影響から捉えていくことにする。

- ・ 歴史的構造化ご招待 (Historically Structured Inviting: 以下 HSI)
- ・ 複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: 以下 TEM)
- ・ 発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis: 以下 TLMG)

HSI とは、自身の研究目的にあう対象者をインタビューへご招待することである。本調査では当初、EFP を「高校で3年間の日本語学習を終え卒業する」と設定したため、調査対象校で日本語を学んだ既卒生に調査協力依頼を行い、協力の得られた4名をインタビューへご招待した。

TEM とはインタビューデータを分析し、非可逆的時間軸上に表した図のことである。EFP を設定した上で、個人の変遷と、それに影響を与えた社会的な力を「社会的助勢 (Social Guidance 以下: SG)」、「社会的方向づけ (Social Direction 以下: SD) などの概念として表すことで、経験の過程を可視化し分析することができる。本調査における TEM の重要概念は表4に示した。

TLMG とは、径路の選択や新たな選択肢が生じた際に、実際の径路選択に影響を与えている意識や価値観の有無、それらの発生を明らかにし、調査協力者の内的変容過程を三層に分けて明らかにしようとするモデルである。安田ほか（2015）では、第一層はアクティビティが発生する個人行動レベル、第二層はサインが発生する記号レベル、第三層はビリーフが発生する信念・価値レベルと説明されている。本調査では、各層を以下表 4 で示した通りに位置づけし、分析を行った。

表 4 TEM の重要概念と本調査での位置づけ

TEM 用語	用語が意味する概念	本調査における位置づけ
等至点 (EFP)	研究者が設定した研究対象となる現象	「高校卒業後も日本語学習を継続する」
両極化した等至点 (P-EFP)	等至点に至らない場合に考えられ得る現象	「高校卒業後に日本語学習をやめる」
必須通過点 (OPP)	多くの人が論理的・習慣的・制度的・結果的に経験するであろう事象	中国の教育制度上経験すると考えられる事象
分岐点 (BFP)	径路が分岐するポイントであり、どちらの径路に進むか逡巡がある状態	4 人の径路の分岐点と、個人の径路上で行われた重要な選択
社会的助勢 (SG)	EFP に向かうのを助けた環境的、外的要因	日本語学習継続を助けた外的要因
社会的方向づけ (SD)	EFP に向かうのを妨げた環境的、外的要因	日本語学習継続を妨げた外的要因
TLMG 第一層	個人行動 (アクティビティが発生)	学校での活動と個人の行動、それに影響を与えた SG, SD
TLMG 第二層	記号 (サインが発生)	第一層により生じた感情や考え、感情
TLMG 第三層	信念・価値 (ビリーフが発生)	第一層での活動を変容させていると考えられる価値観や信念

本調査では、高校 3 年間という決められた枠組みの中で、しかも進学や、中国の大学入学試験である高考の受験など高校生活を送る上で、通らなければならない制度的な制約が存在する状況下で、学習者はそれぞれどのような径路を辿ったのか、どのような学びや動機づけがあったのかを明らかにする必要がある。そのため、調査対象者の高校 3 年間の学びの過程を可視化し、動機づけや動機の変容を分析するために TEA を採用した。

### 3.4 分析手順

まず、HSI の手順に沿って、EFP を「高校で 3 年間の日本語学習を終え卒業する」と設定し、調査依頼を行い、協力の得られた 4 名にインタビューを行った。TEM では、丁寧に話を聞くために 3 回のインタビューを奨励している (安田・サトウ 2012)。インタビューを重ね、TEM を作成し、改良していく中で、研究者と調査協力者の認識や、語りの捉え方に「ズレ」がなくなり、調査協力者の意向を正確に示し、研究者の目的に沿った TEM が完成すれば、「トランス・ビュー (Trans-view) 的飽和」に至り、結果として「真正性」が保証された TEM の完成に至るということである。本研究でも、この「トランス・ビュー (Trans-view) 的飽和」を

TEM 作成のゴールと設定し、各調査対象者に2~3回のインタビューを行った。筆者と調査協力者4名は2年間、日本語教師と学習者という関係だったこと、現在も連絡がとれるような関係性が続いていたことを考慮し、当初は2回のインタビューを設定した。しかし、インタビューを実施し、TEM を作成していく過程で、2回では「トランス・ビュー (Trans-view) 的飽和」に至らないケースもあり、その場合は追加のインタビューを実施した。また、当初の EFP は「高校で3年間の日本語学習を終え卒業する」であったが、インタビュー過程で、協力者4名全員が高校卒業後も何かしらの形で日本語学習を継続していたため、「高校卒業後も日本語学習を継続する」と EFP を変更した。これにより、高校3年間の経験だけでなく、その経験が現在の生活にどのような影響を与えているかを見ることができ、高校での日本語学習とその後の人生との関わりを捉えることができると考えられる。

初回インタビュー終了後に、調査協力者4名分のインタビューデータを切片化し、時系列に並べ替え、4名が共通して経験した出来事と、教育の制度上経験するであろう事象を必須通過点（以下：OPP）と設定し、4名の径路が分かれたポイントを分岐点（以下：BFP）と設定した。さらに、個人にとって重要な径路選択であったと考えられるポイントをそれぞれの BFP として設定し、BFP に影響を与えたと考えられる SD と SG を検討し、各人の暫定 TEM を作成、2回目のインタビューを行った。その後、2回目のインタビューでトランス・ビューに至った場合は、そこでインタビューを終了し、新たな語りや径路が出現した場合は、再度 TEM の検討を行い、3回目のインタビューを行った。そして、トランス・ビューに至った4名の TEM 図を統合し、進路別の特徴や傾向を分析後、TLMG の検討を行った。

#### 4. 調査結果

次項の図1, 2がインタビュー調査により作成された4名分(A~D)のTEMを統合したものである。図上に記されているA~Dは調査協力者を表している(上掲の表3)。

図3は本稿でのTEM上の概念図式を示している。TEM中でSG, SDを表している図式の矢印の幅は、各SG, SDが影響を与えた期間を反映しており、SG, SDが径路選択に影響を与えていた期間が長ければ長いほど、矢印の幅も長くなっている。

TEMを作成する過程で、径路が多様化するきっかけとなっていると考えられるBFPとOPPをもとに、ある程度共通した4つの時期区分ができることが分かった。第一期は高校入学以前で、外国語として英語を勉強している「高校入学前・英語学習期」である。第二期は、高校入学後に調査対象者4名が日本語の学習を始め、同じような経験をし、径路が共通している「高校入学後・日本語学習開始期」とした。そして、高校卒業後の進路を決める段階になって、それぞれの径路が分岐していく。この高校卒業後の進路が決まる時期から高校卒業までが第三期で「高校三年次・進路決定期」とした。さらに、高校卒業からEFPを経て、現在までを第四期「高校卒業後・日本語学習継続期」と命名し、区分を設定した。第一期と第二期は図1に、第三期と第四期は図2に示している。

作成したTEMをもとに、各時期区分における、日本語学習動機の発生や、変容、個人間・進路間での違いを分析検討した。分析に関して本文中では、TEMの概念にあたるもの(OPP, BFPなど)を< >で、調査協力者の感情(記号:第二層)を【 】で、第三層を『 』で示す。

高校で第一外国語として日本語を学んだ学習者の動機とその変容

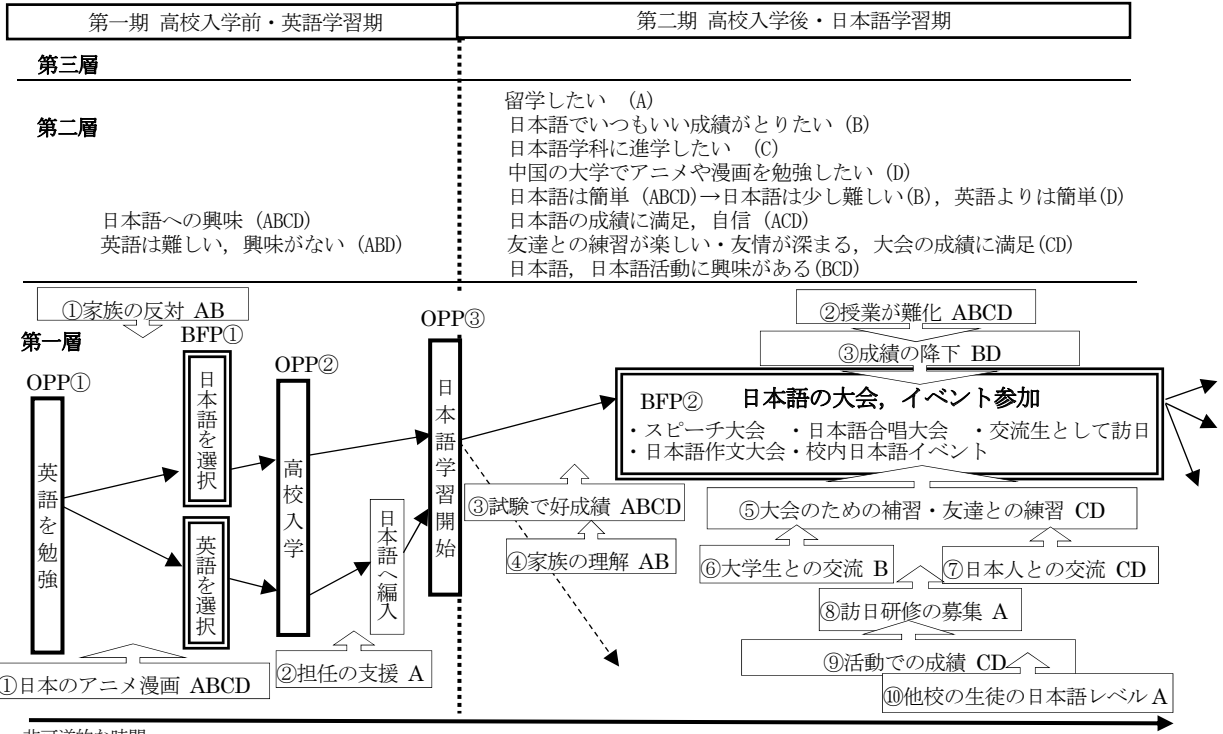


図1 第一期, 第二期 TEM (4名統合)

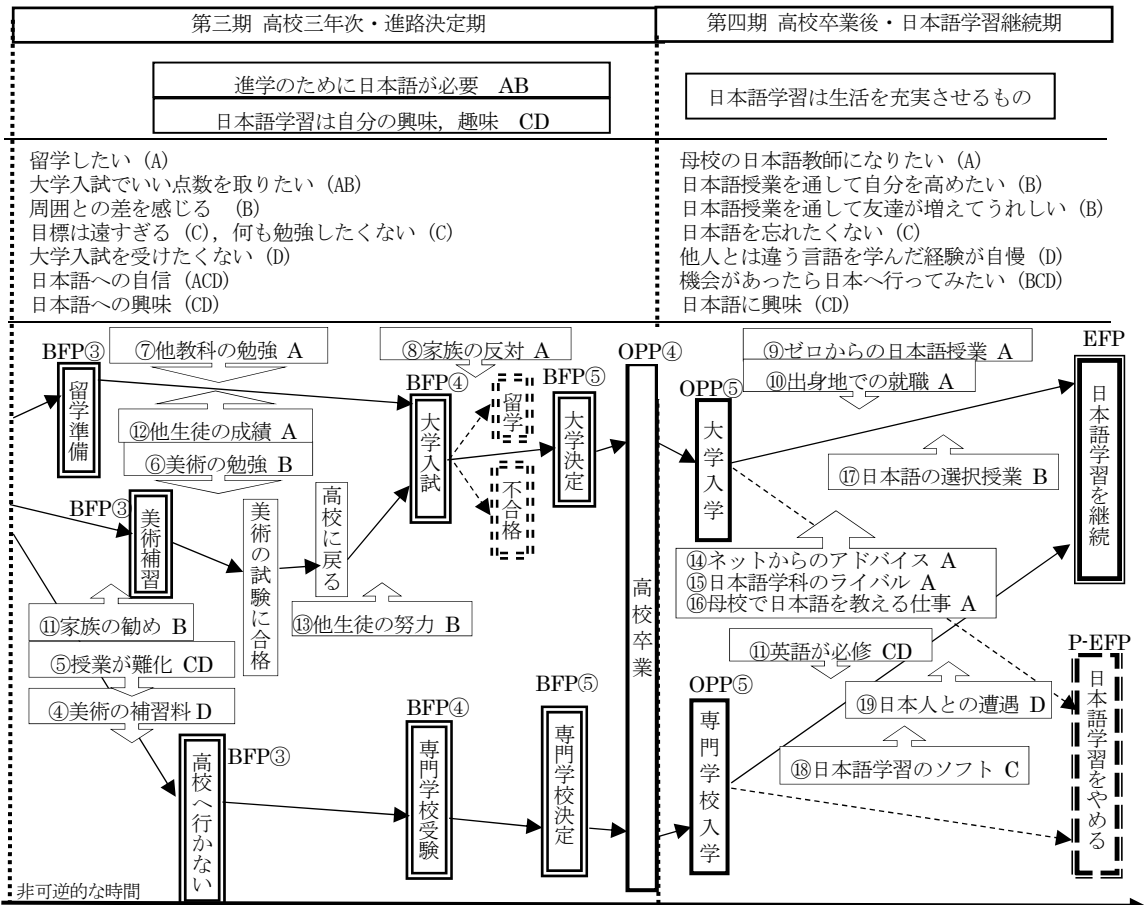


図2 第三期, 第四期 TEM (4名統合)



図3 TEM上の概念の図式

#### 4.1 第一期「高校入学以前・英語学習期」における日本語学習動機の発生

高校入学前は、4名全員が＜英語を勉強 OPP①＞していた。Aは7歳から英語塾に通っていた。これは、当時通っていた小学校の英語授業が6年生からだったため、本人の意思ではなく、家族が決めたことである。BとDは、小学3年生から小学校の必修科目で、Cは中学1生から中学校の必修科目として学習を始めている。

英語学習については、Cが中学での英語の成績に満足しており、興味もあったと述べているが、それ以外のABDは英語学習に対して前向きな姿勢ではなかった。最も早く学習を開始したAは、長い間学習を続けているにも関わらず、中学入学以降は他生徒とのレベル差を感じ【英語が嫌い、勉強したくない】という思いが生じている。また、BとDは小学生の時から【英語に興味がない】と感じており、中学入学以降は、【英語は難しい】【英語は試験のため】と感じていた。

このような状況で、4名は中学時代に、＜日本のアニメ漫画の存在 SG①＞が動機づけとなり、日本語へ興味を見出していくようになる。そして、それが高校入学時の＜日本語を選択 BFP①＞につながっている。AとBは＜日本語を選択 BFP①＞する際に、大学入試に英語のみを指定している大学があることや、日本語が英語に比べ少数言語であることなどから＜家族の反対 SD①＞を受けているが、自らの強い希望で日本語を選択し、Aは一度家族の要望により英語を選択するも、入学後に＜担任の支援 SG②＞を受け、日本語クラスへ編入をする。4名は中学時代に＜日本のアニメ漫画の存在 SG①＞に強い影響を受け、自らの興味に合わせて、自身の意志で高校入学時に＜日本語を選択 BFP①＞していることが分かる。

この第一期は、日本語学習を本格的に始める前段階のため、日本語学習に関する信念や価値観などの第三層は捉えられなかったが、＜日本のアニメ漫画の存在 SG①＞から生まれた日本語学習への興味はかなり強いものであったことが分かる。

#### 4.2 第二期「高校入学後・日本語学習開始期」における日本語学習動機と変容

日本語学習開始後は、初めての中間試験で4名とも＜試験で好成绩 SG③＞を獲得する。この時の試験問題は、五十音と簡単な単語のみで平均点も高かったが、学習開始初期に、4名とも【日本語は簡単】だと感じ、＜試験で好成绩 SG③＞から、ACDは【日本語の成績に満足、自信】を持ち、Bも【日本語でいつもいい成績がとりたい】と思うようになる。さらに、＜試験で好成绩 SG③＞の影響もあり、AとBは日本語学習に反対していた＜家族の理解 SG④＞も得られるようになる。

その後は、4名とも＜日本語の大会、イベントに参加 BFP②＞を経験しており、＜大会のための補習・友達との練習 SG⑤ (CD)＞や、市内スピーチ大会での＜大学生との交流 SG⑥ (B)＞、日本語イベントでの＜日本人との交流 SG⑦ (CD)＞、＜活動での成績 SG⑨ (CD)＞など多くのSGが動機づけとなり、【友達との練習が楽しい・友情が深まる (CD)】、【大会の成績に満足 (CD)】、【日本語、日本語活動に興味がある (BCD)】という第二層が生じている。そし



て、この第二層が日本語学習動機となり、日本語学習や大会・活動にも積極的に取り組んでいた。このBFP②での経験は、【日本へ留学したい (A)】、【日本語学科へ進学したい (C)】、【大学でアニメや漫画の勉強をしたい (D)】など、将来的な目標を考え始めるきっかけとなり、さらなる学習動機となって第三期へとつながっている。

一方で、日本語学習が進むにつれ授業が難化SD②>し、BとDは当初に比べ成績が降下SD③>していく。そしてBは【日本語は少し難しい】と感じるようになる。しかし、学習開始当初の成績から生まれた日本語学習への自信や、BFP②を通して得られた動機づけとそこから生じた学習動機から、4名とも日本語学習が停滞することはなかった。

このことから、日本語学習に対する自信や満足感を得られるかどうか、学習を継続する動機に大きく影響を与えていることが分かる。また、この時期は、試験の成績や直接的な日本語授業とは関係なく、日本語に関わる大会や活動への参加に伴うクラスメートとの練習、大学生や日本人、外部の生徒との関わりが日本語学習を継続、強化する動機づけとして存在していることが分かる。そして、このような外部からの動機づけを受けていれば、授業内容の難化や成績の降下は、日本語学習自体に大きな影響を与える可能性は低いと考えられる。

#### 4.3 第三期「高校三年次・進路決定期」における日本語学習動機と変容

第三期は、高校3年生にあたる時期である。第二期までの日本語学習は、4名とも似たような径路を辿っているが、第三期からはそれぞれの目標進路により径路が分かれていく(BFP③)。

まず、Aは第二期で【日本へ留学したい】という思いが生じ、第三期では実際に留学準備BFP③>を始めている。BとDは、一般の大学入試とは異なる美術入試<sup>4</sup>での大学進学を考え、Bは<家族の勧めSG⑩>もあり、高校は休暇をとり、校外で行われている<美術補習BFP③>に参加することになる。

一方で、Dは<美術の補習料SD④>が高額であることから美術入試を諦め、第二期で思い描いていた【大学でアニメ漫画の勉強をしたい】という目標の実現が難しくなった。この第三期からは、学校での日本語授業が大学入試である高考対策となり、さらに<授業が難化SD⑤>する。これにより、Cも第二期で考えていた【大学の日本語学科へ進学したい】という目標は遠すぎると感じるようになり、高校入学当初から考えていた大学進学という目標がなくなってしまう。その結果、CとDは第三期で<高校へ行かないBFP③>という径路に進むことになる。これは、中国では毎年3月に高校3年生を対象に実施される「会考」と呼ばれる高校卒業認定試験があり、会考に合格すれば、高校卒業資格を取得することができるためである。会考の後、高校での授業は高考対策中心となり、大学進学を考えていない生徒は、卒業まで授業に出席しないことが多く、CとDも同様の径路を辿ることとなる。

第三期での日本語学習に関しては、Aは留学の準備をする一方で、家族の要望により高考の勉強も始めている。そのため、<他教科の勉強SD⑦>により、日本語の学習時間が十分に取れないと感じながらも、<他生徒の成績SG⑫>が上がってきたことに刺激を受け、日本語学

<sup>4</sup> 大学入試には、普通受験と美術音楽体育を専門として学ぶ生徒向けの音体美受験がある。音体美受験は実技試験に合格した後、普通受験同様の筆記試験を受けるが、一般受験の生徒と比べ筆記試験の合格点数は低く設定されている。

習に意欲的に取り組んでいた。BはBFP③以降、美術の勉強が忙しく、日本語は学習時間がとれずに停滞する。そして、美術の実技試験に合格後、高校に戻り【大学入試でいい点数をとりたい】と思うが、同時に美術の補習で日本語学習をしていなかったため、【周囲との差】も感じている。しかし、＜他生徒の努力SG⑬＞が動機づけとなり日本語学習が強化された。

この時期に、AとBは日本語学習の捉え方に変容が起こっていると考えられる。第二期までは自身の興味や、大会やイベントからの動機づけにより支えられてきた日本語学習が、留学や高考という具体的な目標を持ち、他生徒とのライバル関係や【試験でいい点数をとりたい】という思いが強くなることで、日本語学習を教科の一つ、目標をかなえるための道具として捉えるようになっていく。第二期では「興味」や「楽しい」という思いで続けられていた日本語学習が、『目標をかなえるために日本語が必要』という道具的なものに変化したと考えられる。これにより、AとBは高校で行われている高考に向けた授業に適応し、日本語学習を継続し、＜大学入試BFP④＞へ至っている。その後、Aは留学を希望したが、＜家族の反対SD⑧＞の影響で留学を諦めることになる。しかし、高考で満足できる成績を獲得し、大学の日本語学科への進学を決め、＜大学決定BFP⑤＞をする。Bも高考で満足する成績を得て＜大学決定BFP⑤＞している。

一方で、大学進学を諦めたCとDは、この第三期で、高校での日本語学習を後押しするSGがなくなり、動機づけが受けられなくなっている。そして、実際に2名ともこの時期は日本語学習が停滞している。しかし、CもDも日本語学習への興味自体は失わなかったという。2名とも日本語の成績が学年が上がるにつれて下降しても、成績と日本語への興味は関係ないと考えようになっており、Cは「自分が興味のあることは日本文化や会話で試験のための日本語には興味がない」、Dは「勉強はだんだんついていけなくなったけど、日本語にはずっと興味があって面白い。日本に遊びに行きたい、留学にも行ってみたい、だからずっと日本語に興味があった。」とこの時期を振り返っている。

留学や大学進学のための道具として日本語を捉えるようになったAとBに対して、CとDはこの時期に『日本語学習は自分の興味・趣味である』という第三層が発生し、日本語学習を改めて捉えなおしていると考えられる。そのため、高校での高考対策の日本語授業と、CとDが求める日本語学習との間に葛藤が生じ、「日本語には興味があるけど、高校での日本語授業には興味がない」という状況に至ったと推察できる。CとDはこのような状況下で、高考を受けなくても、独自の入試を行っている専門学校が存在を知り、＜専門学校受験BFP④＞を経て＜専門学校決定BFP⑤＞に至っている。

#### 4.4 第四期「高校卒業後・日本語学習継続期」

高校卒業後は4名ともそれぞれの径路を辿りながらEFPに至り、現在も日本語学習を継続している。

Aは、大学の日本語学科に進学したため専門科目として日本語学習が続けられたが、大学入学当初は、他学生との＜ゼロからの日本語授業SD⑨＞に意味を見いだせずいた。さらに、大学卒業後に自身の＜出身地での就職SD⑩＞を望んでいるものの、地方都市である出身地では、日本語を活かせる仕事を得ることは難しいという現実もあり、日本語学習は順調ではなかった。一方で、日本語学習サイトやチャットで勉強方法などの＜ネットからのアドバイスSG

⑭>を得て自分のペースで自学を続け、さらに大学入学後に日本語学習を開始した<日本語学科のライバル SG⑮>の存在や、自らが日本語を学んだ<母校で日本語を教える仕事 SG⑯>の存在が動機づけとなり、【母校の日本語教師になりたい】という目標が生まれ、日本語学習を強化している。Aは第一期で英語に対し【嫌い、勉強したくない】という思いを抱いていたが、目標を叶えるためには修士号が必要であることが分かり、大学院への進学を目指し英語の勉強も再開している。

Bは、大学のデザイン専攻に進学したが、<日本語の選択授業 SG⑰>があったため、その授業を履修し学習を継続している。Bは、日本語授業では他専門の学生と交流することができ、【日本語の授業を通して友達が増えてうれしい】【日本語を通じて自分を高めたい】という思いを持って日本語学習を継続している。

CとDは、進学先の専門学校に日本語授業がなく、英語が必修であったため、ABとは異なり、環境的に日本語学習を後押しする要因はなかった。しかし、CDともに高校時代から日本語への興味を持ち続けており、Cはアニメへの興味や、【日本語を忘れたくない】という思いから、日本語のアフレコを練習できるアプリや日本語学習サイトを使い、自身の興味にあわせる形で日本語学習を再開し継続している。Dは高校卒業後も、【他人とは違う言語を学んだことが自慢】と感じているという。街中で偶然<日本人と遭遇 SG⑱>した際に、他の人が全く理解できない日本語を、自分だけが少し理解できた経験などがDの自信になっており、高校時代の教科書を読むなど、独学で日本語学習を継続するに至っている。

高校卒業後の第四期は、日本語学科に進学したAを除く3名にとって日本語学習は、必ずしなければならないものでも、外部から積極的に求められているものでもない。また、日本語学科に進学したAも、高校までとは違い、学習を自身でコントロールしていく必要がある。このような状況におかれた際に、4名とも自身の意思とペースで、自分にあった日本語学習を見出し、学習継続に至っている。高校卒業後の4名にとって日本語学習は、試験や大学入試のためでも、ただ【興味がある、楽しい】というものでもなく、将来の目標のためや、友人を増やし、自分に自信を与えてくれるなど『自身の生活を充実させるもの』として、価値変容が起こっていると考えられ、これにより自身にあった形で、それぞれの環境に合わせたツールを使うことで、<日本語の学習を継続 EFP>へ至っていると考えられる。

## 5. 考察

調査対象者4名の日本語学習過程を可視化することにより、時期に応じた日本語学習動機やその変容、新たな動機づけの存在を明らかにすることができた。

まず、日本語学習開始前の第一期では、日本のアニメや漫画に対する興味が日本語自体への興味につながり、高校での日本語学習開始の大きな動機づけになっていることが分かった。また、高校入学以前の英語学習と比較すると、4名とも自身の意志で日本語を選択しており、必修科目や親の勧めで早くから始められる英語学習と違い、高校からの日本語学習には4名の強い希望が存在していることが分かった。このことから、学習開始期に持っている強い興味や意志を、学習過程でさらに強化し、アニメ漫画以外にも興味や動機づけとなる事象を増やしていくことで、日本語学習を強化することができると考えられる。

本調査の対象者4名は、第二期で元々持っていたアニメ漫画に対する興味を、アフレコ大会

などの活動を通して強化することができており、さらにスピーチ大会や交流会で、他校生徒の日本語レベルを知り、日本語を学ぶ大学生や、日本人との交流が動機づけとなり、日本への留学や日本語学科への進学、アニメ漫画を専門的に学べる学校へ進学したいなどの新たな日本語学習動機が発生していた。4名全員が第二期まで、積極的に日本語学習に取り組むことができていたのは、学習開始期から第二期にかけて受けた外部からの動機づけの存在が大きかったと推察できる。

一方で、第三期に入ると、日本語学習への捉え方に変化が出てくる。この時期からは、日本語や日本文化への興味を深めるようなイベントや交流会などの外部からの動機づけがなくなってしまう。この時点で、日本語学習に対する価値観が、『目標をかなえるために日本語が必要』という道具的な捉え方に変容していれば、高校での高考対策を中心とした日本語授業や、周囲の生徒の成績、ライバルの存在が動機づけとなり、日本語学習は強化される。一方で、高考の受験を考えていない学習者は動機づけがなくなってしまう。しかし、本調査の対象者であるCとDは、学校での日本語学習が自身とあわなくなっても、日本語自体への興味は失っていなかった。これは、第二期での経験から『日本語学習は自分の興味・趣味である』と自身の中で日本語学習を明確に位置づけていたからだと考えられる。調査対象者が通っていた高校は、大学の受験資格が得られる高級中学であるため、高校3年時に授業が高考対策になることは避けられず、第三期は大学進学を希望しなくなった学習者にとって、自分の目的にあった日本語学習の場がなくなってしまう時期でもある。そのため、高校在学中から高考以外の日本語に触れる機会や、自分の興味のある日本語を学べるような環境、自学を進められるような教材や学習サイトなどを有効に活用できれば、第三期で高校での日本語学習があわなくなった場合でも、高考対策以外の方法で、学習を進めていくことができると考えられる。

第四期では、4名とも他者から積極的に要求される状況ではない中で日本語学習を継続している。Aは母校の日本語教師になるために大学院進学をめざし、BCDも機会があれば日本へ留学してみたい、行ってみたいと考えており、4名にとって日本語学習は『自身の生活を充実させるもの』となっている。そして、インターネット上でアドバイスを得たり、日本語授業で他専門学生と交流したり、オンライン学習サイトやアプリを使用することが動機づけとなり、学習者自らの手により日本語学習が継続されていくことが分かった。

Aは高校での日本語学習経験から大学進学を果たし、新たな目標を実現するために、日本語学習を継続している。Bは、高校での日本語学習がきっかけとなり進学した大学で、日本語という共通の興味や趣味が交友関係を広げ、生活を充実させることができている。CとDは大学などでの学習機会はないが、高校時代の日本語学習経験が自信となり、日本語学習を継続することで、その自信を維持し、さらに深めていると推察できる。高校入学後に当初の興味を強化し、新たな動機づけを多く受け、学習過程で日本語学習の意味や、日本語学習に対する信念を確立できれば、外部から日本語学習が求められない環境になったとしても、趣味や生涯学習として、自主的に学習を継続していくことができるようになると考えられる。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、2015年以降、学習者数が急増している中国中等教育での日本語学習者の学習動機とその変容を明らかにするために、高校での学びを終えた4名の協力者へインタビュー調査を

行い、複線径路等至性アプローチを用いて行った分析をまとめた。その結果、4つの時期区分に応じた動機と動機づけの変容が明らかになった。特に、高校卒業後の進路に向けて径路が分岐する第三期においては、学習者それぞれに日本語学習に対する価値観ができあがり、高校での高考対策の授業に適応していく者と、自身の持つ価値観と学校での授業との間に葛藤が生じ、学習が停滞する者の存在が明らかになった。一方で、第三期での停滞が、必ずしも日本語学習自体への興味の消失にはつながらないことも分かった。今回の調査では、高校1,2年生にあたる第二期で、多くの動機づけを受けたことで、日本語学習に対する価値観が確立され、学習停滞を経ても、自身の興味やペースに合わせて学習が再開される過程が明らかとなり、この時期の外部からの動機づけの重要性を示すことができた。

本調査は、高校で第一外国語として日本語が選択できる普通科高校の卒業生で、中国国内で進学した者に対象者を絞って行った。しかし、高校卒業後の進路は国内進学だけではなく、留学や就職などの選択肢もある。また、学習動機や動機づけは、社会的な背景や学習者の個人要因により異なる。そのため、今回の調査で示された学習動機や動機づけが、中国の高校生に広く一般化できるものとは言えない。特に、地域によって教育制度や、経済・文化が大きく異なっている中国においては、それぞれの地域に特有の学習動機・動機づけが存在している可能性がある。中国の中等教育全体の状況や学習動機を分析するには、更に多くの異なる地域や背景におかれた学習者を対象とした調査が必要である。

#### 参考文献

- 大西由美 (2010) 「ウクライナにおける大学生の日本語学習動機」『日本語教育』147, 日本語教育学会, pp.82-96.
- 韓秀蘭 (2012) 「中国延辺朝鮮族の中等教育における日本語教育の展望」『人文論叢：三重大人文学部人文科学研究紀要』29, pp.175-183.
- 張立偉 (2017) 「内モンゴル自治区における日本語専攻学習者の動機づけに関する調査：学年による違いを中心に」『大阪大学言語文化学』26, pp.85-99.
- 中山裕子 (2019) 「紛争前後におけるシリア人日本語学習者の動機づけ変容：複線径路・等至性アプローチを用いて」『一橋大学国際教育交流センター紀要』1, pp.41-54.
- 根本愛子 (2011) 「カタールにおける日本語学習動機に関する一考察：LTI 日本語講座修了生へのインタビュー調査から」『一橋大学国際教育センター紀要』2, pp.85-96.
- 安田裕子・サトウタツヤ編著 (2012) 『TEM でわかる人生の径路 質的研究の新展開』誠信書房
- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編著 (2015) 『ワードマップ TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社.
- 李杨 (2018) “湖北省中等日语教育现状及发展构想”《文教资料》779 (5), 南京师范学院, pp.147-149.
- 杨豪杰 (2012) “日语学习动机与学业成绩自我评价的关系”《宁波工程学院学报》24-4, 宁波工程学院, pp.123-128.

調査資料

国際交流基金 (2016) 「日本語教育 国・地域別情報 中国 (2016)」

<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/china.html>> (最終閲覧日 2020年8月24日)

国際交流基金 (2017) 「海外の日本語教育事情 2015年度日本語教育機関調査より」

<[https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey\\_2015/all.pdf](https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2015/all.pdf)>  
(最終閲覧日 2020年8月24日)

国際交流基金 (2020) 「海外の日本語教育の現状 2018年度日本語教育機関調査より」

<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2018/all.pdf>>  
(最終閲覧日 2020年8月24日)

文部科学省 (2019) 「諸外国の教育統計 平成31(2019)年度版」

<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/data/syogaikoku/\\_icsFiles/afieldfile/2019/08/30/1415074\\_0\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/syogaikoku/_icsFiles/afieldfile/2019/08/30/1415074_0_1.pdf)> (最終閲覧日 2020年8月24日)